

リカオンの創傷管理について

野村美佳, 東野晃典, 植田美弥, 緒形倫子
(公益財団法人横浜市緑の協会 よこはま動物園)

リカオンの創傷管理の1例について報告する。症例は群れ飼育の個体であり、他個体との闘争により右前肢の手根部を中心に指端部～肘関節付近に咬傷を負った。また、第2.3.4中足骨に開放性骨折を認めた。汚染創であり軟部組織の欠損も重度であったため、断脚も考慮したが、受傷後間もないことから温存療法を試みることにした。また、骨折についても汚染創であることから治療は行わないこととした。

受傷日は、患部の毛刈り、洗浄、デブリード、皮膚縫合し、一部開放創とした。創面は覆わず、感染コントロールを重視し、抗生剤の静脈注射を実施した。創傷管理が必要なため、群れから隔離し、個体が患部を触らないようにエリザベスカラーを装着した。1日1回、保定下にて抗生剤の静脈注射、患部の洗浄、デブリードを行った。受傷後2日目に肢端部の腫脹が顕著になったこと、また創面の汚染防止のため、創面に軟膏を塗布しガーゼで覆い圧迫包帯をし、浸出液を吸収できるようにした。受傷後7日目には肉芽組織の増生を認め、12日目には包帯をすべてはずしてしまったが、経過も良好なことから、以後抗生剤を経口投与に変更し、約3日ごとに患部の確認を行い必要に応じて洗浄を行った。受傷後24日目には、辺縁部から上皮化も認められたため、長期間作用型の抗生剤を注射し、以後様子観察とした。受傷後35日目には、上皮が全体を覆い、骨折部位に関しても可動性は認められず、ほぼ歩行に問題ないため、エリザベスカラーをはずし治療終了とした。

今回、咬傷が広範囲にわたり、中足骨も露出していたため、初診時には断脚が必要かどうかの判断が難しかった。結果的には感染のコントロールも良好であり、創傷管理としては概ね良好な経過が得られたと思われる。